

## 江戸の坂道散策

## 第7回 無縁坂 (文京区)



## 山野 勝 Yamano Masaru

坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役。『タモリのTOKYO 坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に「江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド」（朝日新聞社）がある。

**文** 京区湯島四丁目十二と台東区池之端一丁目三の間に、江戸の風情と歴史を感じさせる名坂「無縁坂」がある。上野の不忍池を背に、東大病院のある本郷台地へ、やや湾曲しながら美しく駆け上る。

坂名の由来はお寺の山号や寺号に因る。現在、坂上北側の、土蔵造りの本堂で有名な講安寺のあたりに、無縁山法界寺というお寺があった。元は近くの湯島天神下にあったが、元和二（一六六一）年に現在地に移り、正保二（一六四五）年に講安寺と称仰院の二つに分かれた。称仰院は今も坂の北側にあるが、初めは法界寺の開山・重達の隠居地で、無縁寺と称していたという。

また、坂の周辺には武家屋敷が多く配され、武家に縁があるので武縁坂とか武辺坂とも呼ばれた。坂の南側には、古い石垣と煉瓦塀がそそり立ち、樹木が緑の影を投げて、坂を威圧しているようにも感じられる。

江戸時代、ここに徳川家康四天王の一人、榊原康政を藩祖とする越後高田藩十五万石・榊原式部大輔の中屋敷があった。明治維新後、桐野利秋（人斬り半次郎こと中村半次



坂上にある講安寺の美しい境内

**茶屋** 文京区小石川三丁目六と四丁目二の間に「三百坂」という坂がある。都立竹早高校の東脇を北に下る。

坂の近くに常陸府中藩二万石・松平播磨守の上屋敷があった。松平家に新規に採用された徒の者は、袴で殿様に御目見すると、直ちに衣服を着替えて登城行列に追いつかなければならなかった。遅れると銭三百文の罰金が科せられたので三百坂の名が生まれた。下級武士の悲哀が漂っている。

郎）邸、舞鶴県知事邸を経て、旧三菱財閥・岩崎弥太郎の所有となった。戦後はGHQに接収されたが、返還後、最高裁判所司法研究所になり、現在は「都立旧岩崎邸庭園」として一般公開されている。

無縁坂は森鷗外の小説「雁」の舞台にもなった。ヒロインお玉の妾宅が坂の中腹に設定され、岡田青年との出会いが描かれている。かつては、仕舞屋風の家屋が立ち並んでいた。今は昔の無縁坂の光景である。